

# あなたの生活に 文学を

阿部 公彦

たことがわかり、「剽窃(おしとがめ)ではないか」と問題になったのです。

論文では、資料などを引用すれば必ず典拠を示します。でも、小説でこれをやるとりアリティーが損なわれ、読者も興ざめでしょう。だから多くの場合は末尾に「参考資料」として掲げる。ただ、今回は引用した事実も示さず、せりふや描写を丸ごと使ったりもしていた。盗作とまでは言えないにしても、不適切なのは間違いないでしょう。

問題を複雑にしたのが小説の題材です。「美しい顔」は東日本大震災を扱っており、ルポなどから取材者や被災者の言葉を引いています。被災地に行ったことがない作者のやり方に「搾取だ」「敬意がない」といった批判も出ました。

文学と生活はどうかかわるのか、あらためて考えさせられる出来事がありました。本時評でも取り上げた北条裕子さんの「美しい顔」(「群像」6月号)。作者は作品の記述が実体験に基づかないと明かしていましたが、その後、いくつかの資料を参照し

すべきなのか。安易な代弁は「暴力」にもなる。小説は伝聞や偶然の目撃を利用するところが多いだけに、「罪深さ」とすれすれのジャンルなのかもしれない。

ただ、他方で小説は「物事を当事者のように見る感性」を音みます。それがひいては体験の重みに耐える力にもつながる。震災は被災者以外の人にもさまざまな影響を与えました。被災していないのに心のバランスを崩した人もいます。震災のことを知り、何かを言いたくなる人が当事者でないと言いつけるのか。北条さんの作品も、不器用ながらそんな表現を目指したとも考えられます。みなさんはどう読まれるでしょう。

後者の問題はより微妙です。体験の当事者をどう尊重

震災から7年が経過した今でも、多くの作品に震災が影



絵・片山高志

## 影落とす震災 静かな緊張

を落としています。太田靖久さんの「うみまち」(「すばる」8月号)は、過去に海に沈んだ街が地殻変動で「新しい街」として発見されるといふ報告から始まります。一見SF的ですが、文章はごくことなくよそよそしい。冷静的と言ってもいい。元AV女優の妻に出でいかれ、なかなか立ち直れない「俺」。その「俺」をなぐさめるのがちよつと幻めいたキャバクラ嬢。この女性とふたりで「新しい街」を訪れるうちに「俺」は今まで知らなかった心の秘密と出会います。

太田さんの会話や描写には時折ひやつとする一瞬があり、「新しい街」の微妙な陰影ともあいまって、心理にわけいていく静かな緊張を感じさせてくれます。

今月、圧倒的に読ませるのは辻原登さんの「月も隈なきは」(「文芸」秋号)。定年退職した「奥本さん」は61歳。彼がプチ家出をしてマンションを見つけ、アルバイトを始め、やがて思いもかけない体験をする、という展開はやや出来過ぎかもしれませんが、これがまさに匠の技。読み始めたらとまらない。随所で作家の耳と目が冴え、世界の凹凸がかつちりとりえられる。ノワール(暗黒)風味あり、性描写もありですが、還暦を過ぎた奥本さんの一風変わった「青春小説」でもあり、ラストは実に爽快です。

かいて、この作品のヤマ

## とらえられる世界の凹凸

### 辻原登「月も隈なきは」

場 奥本さんは「運命の悪意による不意打ち」に思いをめぐらせます。報道で知った事件、同僚の「運命」、そして奥本さん自身の体験を踏まえ、考えこむ。この「運命」は作品中ではどちらかというと内面とかかわるものですが、震災を含め「運命」の力を強烈的な痛みとして知る人には、こうした思弁の瞬間は貴重です。考えてみれば、辻原さんはこれまでも巨大な力への畏怖を描いてきた作家なのです。

最後に木村友祐さんの「生きものとして狂うこと」(「新潮」8月号)。木村さんはかつて「聖地」で、放射能汚染が広がる中、家畜たちを守ろうとする人の姿を描きました。今回掲載されたのは震災と文学についてのパリでの講演録。震災と距離をおく作家たちへの批判もあります。読んでいて、正直、熱くノミットするだけがすべてではないのでは?とも私は思いました。

でも、講演の迫力には打たれた。「自身が述べるように、ここには木村さんの声が聞こえる。しかもおもしろいことに、それがフィクションめく。つまり、作品中の声のようでもあった。だからこそ生々しいのか。当事者の声を伝えるとはどういうことか、あらためて考えさせられました。

(英米文学者)

「河童之図」(倉島丹浪作・千曲市蔵)

の中で芥川は、人間社会の苦悩を河童の社会に投影してい